

教員氏名：柳川美麿（教育学科・スポーツ教育専攻／教授）

1. 教育の責任（何をやっているか）

私は教育学部スポーツ教育専攻に所属し、「健康と運動」「教育学研究法」「卒業研究」を担当している。

「健康と運動」は全学共通の教養教育科目であり、スポーツ教育専攻のみならず全学科の学生を対象としている。授業では健康に関する基礎知識や生活習慣病予防、運動習慣、栄養、飲酒、喫煙などについて学ぶ講義と、バドミントン、バレーボール、バスケットボール等を中心とした実技を組み合わせ実施している。

また、「教育学研究法」及び「卒業研究」ではゼミ担当教員として学生の研究活動を指導している。研究テーマの設定から文献収集、研究計画の立案、データ分析、論文執筆までを継続的に支援し、学生が主体的に研究を進められるよう指導している。

授業以外では女子レスリング部監督として競技指導を行っている。これまでにオリンピック金メダリストを含む多くの日本代表選手を育成してきたが、競技力向上のみを目的とするのではなく、社会に貢献できる人材育成を重視している。大学教育と課外活動は別々のものではなく、学生の成長を支える一体的な教育活動であると考えている。

2. 教育の理念（なぜやっているか）

(1) 競技者育成から学んだ教育観

私は大学院で医学を学び、脂肪細胞に関する研究を行ってきた。一方で、レスリング指導者として長年競技現場に携わり、オリンピックや世界選手権を目指す選手の育成に取り組んできた。

その経験の中で強く感じていることは、人を成長させるのは技術指導だけではないということである。どれほど優れた技術や理論があっても、学生自身が努力しようとする意欲や、自ら考えて行動しようとする姿勢がなければ成果には結び付かない。

私は「教育 80%、技術 20%」という考え方を大切にしている。競技スポーツの世界においても、最終的に選手の可能性を広げるのは人間力である。大学教育においても同様

であり、知識や技能の習得だけでなく、社会人として必要な責任感、主体性、協調性を育成することが重要であると考えている。

(2) 学生の学習に対する理念

現在の学生は多様な価値観を持ち、それぞれ異なる背景のもとで大学に入学してくる。そのため、画一的な指導ではなく、一人ひとりの状況を理解しながら教育を行う必要がある。

私は学生との対話を重視している。授業やゼミ活動だけでなく、課外活動や日常的なコミュニケーションを通じて信頼関係を構築し、その上で必要な指導を行うことを心掛けている。

また、厳しさと愛情は対立するものではなく両立するものであると考えている。学生の成長を本気で願うからこそ厳しい指導が必要な場面もあるが、その根底には学生への尊重と信頼がなければならない。

(3) 社会における大学教育の役割

少子高齢化やAIの発展など、社会は大きく変化している。そのような時代だからこそ、大学には知識を教えるだけでなく、自ら課題を発見し解決する力を育成することが求められている。

私は健康教育やスポーツ教育を通して、学生が卒業後も主体的に学び続け、自らの健康や人生を自らの力で切り拓いていける人材となることを目指している。

3. 教育の方法（どのようにやっているか）

(1)健康と運動における教育実践

「健康と運動」は、スポーツ経験の豊富な学生だけでなく、運動が苦手な学生やこれまで体育活動に積極的に参加してこなかった学生も履修する教養科目である。そのため、競技力向上を目的とした授業ではなく、生涯にわたって健康を維持するための基礎的な知識と運動習慣を身につけることを重視している。

講義では、生活習慣病、運動習慣、栄養、飲酒、喫煙など、学生自身の生活と関わりの

深い内容を中心に扱っている。特に、将来教員や社会人として生活するうえで必要となる健康管理能力を身につけることを目的としている。また、オリンピック選手やトップアスリートの事例を紹介しながら、健康管理やコンディショニングの重要性についても説明している。

実技ではバドミントン、バレーボール、バスケットボールなどを実施している。競技経験の有無によって学生間の技能差が大きいため、勝敗や技能のみを評価するのではなく、積極的な参加や仲間との協力、フェアプレーの姿勢を重視している。

(2)ゼミ指導における教育実践

教育学研究法および卒業研究では、学生が自ら課題を発見し、その解決に向けて主体的に取り組むことを重視している。

近年の学生はインターネットを利用した情報収集には慣れているものの、学術論文の検索や先行研究の整理、研究課題の明確化には苦勞することが多い。そのため、研究テーマの設定段階から個別面談を繰り返し実施し、研究の目的や意義を整理するよう指導している。

また、研究活動は論文作成だけでなく、計画的に物事を進める力や論理的に考える力を養う機会でもあると考えている。そのため、研究成果だけではなく、研究過程における成長も重視している。

(3)学生との関係づくり

私は授業やゼミにおいて学生との対話を重視している。特にゼミ活動では個別面談を積極的に実施し、研究内容だけでなく進路や学生生活についても相談に応じている。

また、レスリング競技の指導現場で培った経験から、学生との信頼関係が教育効果を大きく左右すると考えている。厳しい指導が必要な場面もあるが、その前提として学生との信頼関係を構築することが重要であると考え、一人ひとりの個性や背景を理解するよう努めている。

4. 教育の成果（行った結果どうだったか）

(1) 学生の学習成果

「健康と運動」においては、授業終了後の振り返りや授業評価アンケートにおいて、「自身の生活習慣を見直すきっかけになった」「運動を継続することの重要性が理解できた」といった意見が多く見られる。特に健康に関する知識だけでなく、自らの健康について主体的に考える姿勢が育まれていると感じている。

実技授業では、運動経験の少ない学生が積極的に参加する姿や、学生同士が協力しながら活動する姿が見られる。競技スポーツとは異なる視点から運動の楽しさを体験する機会を提供できていると考えている。

(2) ゼミ教育の成果

教育学研究法および卒業研究では、多くの学生が卒業論文を完成させている。研究活動を通して、論理的思考力や課題解決能力、文章作成能力が向上していると感じている。また、卒業後には教員、公務員、民間企業など様々な分野へ進路を決定しており、大学で培った主体性や課題解決能力が社会で活かされているものと考えている。

(3) 課外活動との相乗効果

授業外では女子レスリング部監督として活動している。これまでにオリンピック金メダリストを含む多くの日本代表選手を育成してきたが、その過程で重視してきたのは競技力だけではなく、人間的成長である。

競技スポーツの現場では、努力する力、継続する力、仲間と協力する力が求められる。こうした経験は大学教育においても共通する部分が多く、授業やゼミ指導にも活かされていると考えている。

一方で、学生の学習意欲や学力の差は年々大きくなっていると感じている。同じ授業を受けても積極的に学ぶ学生とそうでない学生の差が広がる傾向が見られる。そのため、今後は学習意欲を高めるための授業方法についてさらに工夫していく必要があると考えている。

5. 教育における今後の目標（これからどうするのか）

(1)短期的目標

近年、生成 AI や ICT 技術の発展により、大学教育を取り巻く環境は大きく変化している。私はこれらの技術を適切に活用しながら、学生の主体的な学びを促進する授業づくりを進めたいと考えている。

また、「健康と運動」においては、知識の習得だけでなく、学生自身が健康的な生活習慣を継続できるような教育内容の充実を図りたい。

(2)中期的目標

教育学研究法および卒業研究では、学生がより主体的に研究活動へ取り組める環境づくりを進めたい。研究活動を通して、課題発見能力、情報収集能力、論理的思考力を育成することを目指している。

また、スポーツ教育、健康教育、競技スポーツ指導で得られた知見を体系化し、教育活動へ還元していきたいと考えている。

(3)将来的目標

私は長年にわたり大学教育と競技スポーツ指導の両方に携わってきた。その経験から、「根性」と「科学」のどちらか一方ではなく、両者を融合させた人材育成が重要であると考えている。

今後は、オリンピック選手育成や大学教育の実践を通して得られた知見を整理し、スポーツ指導者や教育者の育成に役立つ教育モデルとして発信していきたい。

また、卒業後も学生が自ら学び続け、自らの人生を切り拓いていくことのできる力を育成することを、教育者としての最終的な目標としている。

(2026 年 6 月 2 日現在)